

## 上海・日本金融シンポジウム

小林 和子

この春もまた北京大学現代日本研究コースに教  
えに行った。三回目であるが、回を重ねれば慣れ  
るというものでもない。毎年変わる研究生の顔ぶ  
れ、所属等を呑み込んで、中国全国から集まった、  
グループとしての彼らの特性を理解したところに  
は、もう帰国しなければならない。短期集中講義  
の宿命でもある。

コースの日本側教授は原則として友誼賓館とい  
う外国人向けの巨大なホテルないし居住地区に宿  
泊するが、わたしは最初の年にたまたま北京大学  
内の外国人教授および学生の宿泊施設である勺園

を割り当てられた。泊まってみると、大学の中と  
いうのはなかなか便利が良い。質素ではあるが基  
本的な宿泊設備は整っているし（今年は菌磨き・  
櫛セットが初登場）、一分で食堂と事務室に行け  
る。講義室までも歩いて五〜六分である。学生  
（大学院に準ずるコースなので、正式には研究生）  
の大半が入る寮にも近いので、よく彼らと行き合  
う。昨年までの学生も訪ねて来易い。というわけ  
で、わたしはその後も毎年大学内に宿泊した。  
日本も今年の冬は寒かったが、北京も寒かった  
らしい。ことに雨や雪が少なく、全体に春の花が

遅いようだった。大学の構内至る所に、薄紫の花が咲き乱れている。東京の我が家の近くにも春には多く見られる花で、しかし名前は知らないものだった。花屋に出るような洗練された商品となる花ではなく、いわば雑草に近い、野の花である。コースの事務主任の女性に名を聞くと、「二月蘭」といったあと、「二月蘭」といいかえた。二月蘭(ある・ゆえ・らん)とはいいて妙、農曆の二月は今は三月、春の初めに野を覆う、可憐にして強い花である。東京では薄紫だけが、北京では白花が重なりあうように咲いていたのが印象的だった。後で調べたところ、和名は紫花菜あるいは諸葛菜、中国から日本兵が持ち帰ったものらしい。地表から目を転ずれば、八重咲きのぼつてりとした桃の花が目に入る。碧桃(びーたお)である。これらの花は、天津でも上海でも見受けられた。

である。北京大学も復旦大学もこうした学術交流の拠点大学になっており、形は異なるが同じ目標を追っているように思われた。

シンポジウムのテーマは毎年異なり、日本研究を対象とするが、これまでは国有企業の民営化等中国にも共通の分野であったという。金融は初めてだそうで、ことに証券は中国側にはピンとこない感じがした。上海にはむしろ上海証券取引所がある。中国には上海と深圳の二箇所のみ証券取引所があるが、工業の発展、九七年の香港返還(香港取引所がある)、証券取引所のない北部先進地域(北京、天津、大連等)との距離の近さ等から、上海が一步あるいは数歩進んでいる。すなわち中国最大の証券取引所のお膝元であり、一般・経済人の証券取引に対する関心はかなり高く、大学教師とてその例外ではない。しかし、証券を研究対象とするとなると話は別で、まして日本の証

## 復旦大学へ

北京での講義を終えた後、昨年の学生の招待で天津の経済技術開発区と現代日本研究所を訪問、もう一度北京に戻り、今度は上海に向かった。上海の復旦大学日本研究センターが主催する「第六次中日学術研討会：日本戦後金融体系及其変革」に参加するためである。シンポジウムが「研討会」(いえん・だー・ほえ)になる。北京大学の現代日本研究コースも今年が第六期であったが、復旦大学のシンポジウムもやはり第六次である。すなわち同じく一九九一年から開始されている。七〇年代の国交回復、八〇年代の市場経済化、八九年の天安門事件を経て、ようやくこのあたりから地道な学問レベルの交流が可能になったものである。資金的バックはいずれも日本の国際交流基金

券であれば考慮の外というわけであろう。

予定が狂って、わたしが上海に到着したのはシンポジウム開始前日の夜で、すでに復旦大学日本研究センターで打ち合せの会が始まっていた。この夜から足掛け四日間、ほとんど休む暇のない、充実した(させられた、というべきか)会合が続いた。まずは内容を以下に掲げる。

四月三〇日午前 開幕式

全体会議 基調報告 宮島英昭(早稲田大学)

午後 分科会

A組 橋本寿朗(東京大学)「日本に於ける経営不振企業とメインバンクの關係」

傳 鈞文(上海社会科学院)「日

本に於ける銀行と企業の關係」

江 瑞平(河北大学日本研究

所)「日本の農業金融―体制、機

能と問題」

B組 寺西重郎(一橋大学)「日本型システムの転機と金融」

金 泓汎(福建省社会科学学院亜細亜太平洋研究所)「日本のバブル経済と金融との関係」

樂 勇明(三井海上基礎研究所)「動揺する東京資本金融市場」

五月一日午前 分科会

A組 堀内昭義(東京大学)「日本のセーフティネットと金融システムの安定性」

王 偉軍(上海国際問題研究所)「八〇年代後の日本金融体系の二大特徴及びその示唆」

童 適平(復旦大学日本研究中心)

午後 分科会

A組 小林和子(日本証券経済研究所)「証券市場の歴史的展開」

高 紅霞(証券投資編集委員会、同済大学)「戦後日本金融制度の運営体制及び背景」

吳 先満(江蘇省社会科学学院)

心(センター)「戦後日本金融規制の特徴とその効果」

B組 杉浦勢之(青山学院大学)「政府系金融機関の役割」

岳 頌東(國務院発展研究中心)「戦後日本年金制度の金融的運営および中国への示唆」

楊 棟梁(南開大学日本研究中心)「戦後日本経済の追い付きと財政投融資の役割」

「日本の金融構造調整及び中国との比較」

B組 松村文武(大阪経済大学)「金融空洞化を巡る諸問題」

宗 紹英(東北師範大学日本研究所)「日本の金融国際化について」

裴 桂芬(河北大学日本研究所)「金融の国際化時代の日本の金融政策」

五月二日午前

A組 丸 淳子(武蔵大学)「経済成長と証券市場」

薛 万祥(中国人民銀行上海分行)「戦後日本の貿易為替政策」  
尤 憲迅(華東政法学院国際経済法系)「日本の貿易・為替管

理法」

B組 劉 昌黎(東北財經大學經濟研究所)「日本における金融自由化の進展とその意義」

宗 平(復旦大学)「日本の金融自由化と銀行の経営」

于 永達(吉林大学日本研究所)「日本の金融自由化と日本の金融政策に及ぼす影響」

午後 全体会議

参加者代表による交流  
総括と閉幕式

日本人報告者は八人だが、寺西先生は調子を崩されて開会前に帰国され、弟子の中国人留学生周さんが報告を代読した。中国人報告者は一七人だが、うち一人は日本企業に所属している。外国人オブザーバーが四人、香港一人とタイから三人来

ていた。審査委員ともいふべき「評論員」が、復旦大学日本研究中心の鄭勵志先生（本シンポジウムの主催者である）を中心に、復旦大学、上海財經大學、華東師範大學から七人、「列席」が復旦大学の二四人を中心に、上海社会科学学院や上海市政務發展研究中心、さらに解放日報、新華社等のジャーナリズムを含めて、計三六人に上った。また上海空港に迎えに来てくれた若い人達等学生や研究生クラスもいて、なかなかの盛会であった。

報告者はすべて、報告の他に司会やコメントーターをも務めることになっていて、いやもうその忙しさといったら、これが「慢慢的」（まんまんでー）の中国かと言いたくなるほどであった。報告者が多く、分科会形式になっているため、別の組にちょっと聴きに行きたいと思っても、その時間が無いのである。会議場は禁煙で、煙草を吸う男性諸氏は休憩時間には争って建物の外で吸う有

様であった。いわばお客である日本人がこの忙しさであるから、主催者側の復旦大学の先生方は気の休まる暇もなかったと思われる。会議だけの忙しさではない。宿舎が、外国人と国内の上海以外からの出張者として異なり、また宿舎と会議場（復旦大学アメリカ研究センター）と昼食・夕食の場所がそれぞれ異なる。バスに乗ったり、歩いたり、「女性はお化粧直しが必要でしょ……」と日本語の達者な鄭先生に言われて先生の車をホテルまでお借りしたり。「ではお言葉に甘えてお色直しでもしますか」と丸さんと二人で笑ってしまった。

## メインバンクに関心

第一日目の全体会議で行なわれた宮島氏の基調報告は、「金融システムのアメリカ化 (Americanization)」とその修正」である。戦時金融統制

を停止させ、短期金融と長期金融を分離して、法の秩序の下に置くこのアメリカ化は、アングロサクソン・タイプの市場化の最初の大規模な実験でもあったと位置付けられた。宮島報告は、戦後改革で理想とされたエキイティ・ファイナンスと市場をベースにしたシステムが何故定着せず、その理想とは対照的な「強力で裁量性の強い金融行政、間接金融、メインバンク・システム」によって特徴づけられる戦後金融システムが形成されたか、すなわちアメリカ的金融システムの修正Ⅱ「日本化」(Japanization) が生じたかを明らかにしようとした。その他の日本人報告は金融関係の各論が五本、証券関係が二本である。

中国人報告は、A組は周知の枠組みとしての間接金融システムと、とりわけ企業とメインバンクとの関係に注目したものが多かった。B組の報告は比較的現代に集中していたため、市場経済化を

急激に進めつつある中国の近い将来に近年の日本の経験からどう学ぶかといういささか性急な姿勢が強かったようである。

A組の報告と議論を聞いた限りであるが、それぞれ専門は異なれ日本人報告者同士がもつ共通の基盤の厚みと、中国人報告者のそれとのギャップが、思ったよりも大きかったのではないだろうか。このプロジェクトでは日本の金融をとりあげたのが初めてだということもあつたらうが、日本側と中国側の、シンポジウムに対する基本的考えの違いもあると思われる。日本側は当然ながら、日本国内で行なわれると同じくすべての参加者がほぼ共通の研究基盤にたち、あるいは少なくとも読めば理解できる力を持ち、論文の論証過程と結論について議論しようとする。しかし中国側は、高度成長期と最近の変化に主として注目し、中国の当面する問題に引き寄せて教訓を導きだす、あ

るいは効率的なシステムだとして直接学ぼうとする。この姿勢の違いを、アカデミックなレベルでの訓練と蓄積の違いだとはい概に言い切れはしないのではないか。日本側は、たとえ日本に関するシンポジウムであったにしても中国で行なわれ、多くの参加者が中国人である以上、社会主義市場経済を進めつつある中国の現に直面している諸問題をもっと正確に知らなければいけないと思われる。また中国側は、日本の経済について、議論の基礎となる正確な事実を把握するよう努めるべきだと思われる。

最後の日の全体会議で、中国側の優秀論文が発表された。今回はお見えではなかったが、早稲田大学の伊東光晴教授がファンドを提供された「伊東光晴賞」があり、五五才（一）以下で、共通のテーマに沿い、日本学者の論文の紹介にとどまらず自己の見解を展開し、全体との関連を意識し

た、独創的な論文——という基準で選考されたという。栄えある受賞者は、南開大学の楊先生と東北财经大学の劉先生である。伊東先生に代わって賞を手渡された東京大学の橋本先生はまた、復旦大学顧問教授の栄誉に輝いた。オブザーバー参加の香港、タイ国の研究者を含めて、アジアの日本研究の「輪」が、また「和」ともなった数日間であった。

## 雨の揚州

シンポジウムを終えて、外国人と鄭先生を中心とする復旦大学日本研究センターのメンバー計一〇人で、南京・揚州へ短い旅行をした。南京までの快速「先行号」車内からみる風景が、北の北京や天津とは大分違う。夏が暑い地域らしく、二階建ての家の二階に開放的なベランダが見られる。

野原を覆う花は、二月蘭よりは普通の黄色い菜の花のほうがはるかに多い。

この日は中国にいる期間中初めての雨で寒かった。鑑真和上ゆかりの大明寺を見てまわるうち、ふと気が付くと珍しい花の木がある。紫陽花に似るがやや密でない、白い大きな鞠のような花で、趣味よく寄せ植えになっている。これぞ揚州にしかないという「瓊花」(ちよん・ほあ)であった。淡い緑の枝葉とじっくり合った白い花は、雨に濡れてひとときわ艶麗である。歩いていると、またこれに似た木の花がある。小手まりか大手まりの一朵を大きくしたようで、小花が密に重なり合っ糸でかがった鞠みたいだ。揚州の外事課の人は名前を知らなかったが、翌日南京で会った北京大学の教え子に聞くと、まさに「繡球花」(しゅう・ちう・ほあ)だという。ひょっとそぼを見ると、これまで我が家に昔からある、しかし名前はつき

りしない低木がある。竜舌蘭か君が代蘭か、と漠然と思っていたが、「剣木」(じえん・む)だという。感嘆の声をあげて納得した。剣の切っ先よろしく、先の尖った肉厚の葉が盛り上がっているのだ。

中国の旅には、日本の花や木のはるかなふるさとを訪ねる趣もあるといえる。

(こばやし かずこ・当研究所主任研究員)